

あるバナッハ代数とヤコビの多項式

東北大理 猪狩 博

§ 1. 序

始めに Gegenbauer 多項式のおく知られてゐるいくつかの本柄を述べよう (例として [3], [4], [10] を参照).

degree λ の Gegenbauer 多項式は

$$(1-2t\tau+\tau^2)^{-\lambda} = \sum_{k=0}^{\infty} C_k^\lambda(t)\tau^k, \quad -1 < \tau < 1, \quad -1 \leq t \leq 1$$

によつて定義される. $C_k^\lambda(t)$ は

$$(1) \quad C_k^\lambda(t) = \frac{\Gamma(\lambda+\frac{1}{2})\Gamma(2\lambda+k)}{\Gamma(\lambda+k+\frac{1}{2})\Gamma(2\lambda)} \cdot \frac{(-1)^k}{2^k k!} \cdot \frac{1}{(1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}}} \cdot \frac{d^k}{dt^k} (1-t^2)^{\lambda+\frac{1}{2}}$$

と表わされ, これを直交関係

$$(2) \quad \int_{-1}^1 C_k^\lambda(t) C_l^\lambda(t) (1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}} dt = \frac{\pi \Gamma(2\lambda+k)}{2^{2\lambda-1} k! (k+\lambda) \Gamma^2(\lambda)} \delta_{kl}$$

をもち, δ_{kl} は Kronecker の記号である. 関係式 (2) によつて $C_k^\lambda(t)$ を定義しておくと, かつたして, $\{C_k^\lambda\}$ は,

$1, t, t^2, \dots$ を内積 $\int_{-1}^1 f(t)g(t)(1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}} dt$ によって
Gram-Schmidt の方法で直交化したものとあて、適当な定数
倍をして (2) が成り立つようにしておく。

以下 $\lambda = (n-2)/2$, $n = 3, 4, \dots$ とする。今、 $\varphi(t)$ を
区間 $[-1, 1]$ 上の関数とすれば、 $\varphi(\xi \cdot \mathbb{I})$ は \mathbb{R}^n の単位球面 S^{n-1}
上の関数となる、 $\xi = \mathbb{I} = (0, \dots, 0, 1) \in S^{n-1}$ である。従
って $d\xi$ を S^{n-1} 上の正規化したルベーグ測度とすれば

$$\int_{S^{n-1}} \varphi(\xi \cdot \mathbb{I}) d\xi = C_\lambda \int_{-1}^1 \varphi(t) (1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}} dt$$

が成り立つ、 $C_\lambda = 2^{2\lambda-1} \lambda \Gamma^2(\lambda) / \pi \Gamma(2\lambda)$ である。ま
た $SO(n)$ を \mathbb{R}^n の回転群、 du をその上の正規化したルベーグ
測度とすれば S^{n-1} 上の関数 f に対して

$$\int_{S^{n-1}} f(\xi) d\xi = \int_{SO(n)} f(u\xi_0) du, \quad \xi_0 \in S^{n-1}$$

である。 $SO(n-1)$ は \mathbb{I} を変えたりする $SO(n)$ の部分群と
みることが出来る。 $SO(n)$ 上の関数 F は、すなわち u, v_1, v_2
 $\in SO(n-1)$ に対して $F(v_1 u v_2) = F(u)$, $u \in SO(n)$ が成り立つ
ときは帯球関数であると言われる。そのときは $[-1, 1]$ 上の
関数 φ がとれて $F(u) = \varphi(u \cdot \mathbb{I})$ とかける、逆は明らかである。
従って

$$(3) \quad \int_{SO(n)} F(u) du = C_\lambda \int_{-1}^1 \varphi(t) (1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}} dt.$$

さて, H_n^k は n 変数 k 次同次調和多项式の作る空間とすると,
 $Y_n^k(u^{-1}\xi) = Y_n^k(\xi)$ for all $\xi \in S^{n-1}$, $u \in SO(n-1)$ なる元は定数
 倍を除いて唯一存在する, として $Y_n^k(\xi) = C_k^\lambda(\xi \cdot D) / C_k^\lambda(1)$
 であることか示される. $T_n^k \in T_n^k(u) F(v) = F(u^{-1}v)$, u, v
 $\in SO(n)$ により定義される H_n^k 上の表現とすると, $\{T_n^k\}_{k=0}^\infty$
 は完備既約ユニタリ表現となる. 特に帯球関数 $F(u) =$
 $\varphi(u \cdot D) \in T_n^k = (t_{ij}^{n,k})$ をユニタリ展開すると

$$\varphi(t) = \sum_{k=0}^{\infty} d_k c_{ii}^k \frac{C_k^\lambda(t)}{C_k^\lambda(1)}, \quad c_{ii}^k = c_\lambda \int_{-1}^1 \varphi(t) \frac{C_k^\lambda(t)}{C_k^\lambda(1)} (1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}} dt$$

となる, $t_{ii}^k(u) = Y_n^k(u \cdot D)$, $c_{ij}^k = 0$ (i, j) $\neq (0, 0)$ ならば c
 あり, $d_k = \dim H_n^k = \Gamma(k+n-2)(2k+n-2) / \Gamma(n-1)\Gamma(k+1)$
 である.

$[-1, 1]$ 上の関数 φ , ψ に対して積 $\varphi * \psi \in$

$$(4) (\varphi * \psi)(u \cdot D) = \int_{SO(n)} \varphi(v \cdot D) \psi(uv^{-1} \cdot D) dv,$$

$$\|\varphi\| = c_\lambda \int_{-1}^1 |\varphi(t)| (1-t^2)^{\lambda-\frac{1}{2}} dt$$

とすれば

$$(5) \|\varphi * \psi\| \leq \|\varphi\| \|\psi\|$$

は明らかである, 更に

$$(6) \varphi(t) = \sum_{k=0}^{\infty} d_k a_k \frac{C_k^\lambda(t)}{C_k^\lambda(1)}, \quad \psi(t) = \sum_{k=0}^{\infty} d_k b_k \frac{C_k^\lambda(t)}{C_k^\lambda(1)}$$

とすれば

$$(\varphi * \psi)(t) = \sum_{k=0}^{\infty} d_k a_k e_k \frac{C_k^\lambda(t)}{C_k^\lambda(1)}$$

が成り立つ。 $L^{(\lambda-\frac{1}{2}, \lambda-\frac{1}{2})} = \{ \varphi : \|\varphi\| < \infty \}$ とおくと上のこと
が次の定理が容易に示される。

定理1 ([7])。 $L^{(\lambda-\frac{1}{2}, \lambda-\frac{1}{2})}$ は可換、単純、正則、単
位元の可ハナツハ代数である。その極大イデアルの空間
 \mathcal{M} は $\{0, 1, 2, \dots\}$ と同型である。 $\varphi \in L^{(\lambda-\frac{1}{2}, \lambda-\frac{1}{2})}$ に対して
その Fourier-Gelfand 変換は、 $\hat{\varphi}(k) = a_k$ 、 $k \in \mathcal{M}$ と与えら
れる。 φ は a_k は (6) と与えられたものである。

今定数は $\lambda = (n-2)/2$ 、 $n = 3, 4, \dots$ としたリれど上の
定理は $\lambda \geq 0$ に対して成り立つ ($\lambda = 0$ のときは $L'(0, \pi)$ の
関数の cosine 級数展開に他ならない) ことがわかってゐる。
定理1の Gegenbauer 多項式展開に対して群代数で生じた
ような問題が当然起るが、 $\lambda \geq 1/2$ あるいは $\lambda > 0$ に対して、
それは $L'(-\pi, \pi)$ とどの場合より同様に単純多形で治す
とすべしと解決されている。また級数論的問題は $L^p(-\pi, \pi)$
の関数の Fourier 展開の問題に治すとすべしと帰着させること
が出来る。この方面に就いては、Askey, Askey-Wainger,

Hirschman 君の研究がある。また共役関数もある意味で定義してある ([9] 参照)。

§ 2. degree (α, β) の ρ コシ多項式は

$$P_k^{(\alpha, \beta)}(t) = (1-t)^{-\alpha} (1+t)^{-\beta} \frac{(-1)^k}{2^k k!} \frac{d^k}{dt^k} [(1-t)^{k+\alpha} (1+t)^{k+\beta}], \alpha, \beta > -1$$

によつて定義された。 ρ コシ多項式と測度 $(1-t)^\alpha (1+t)^\beta dt$ に係して定常な直交系である。 ρ Gegenbauer 多項式のと類似の結果が成り立つことが知られてゐる。しかし特別に (α, β) にし ρ convolution の定義が単純に書けるだけの計算は煩雑である。

$$L = L^{(\alpha, \beta)} \text{ 上}$$

$$\|\varphi\| = \|\varphi\|_{(\alpha, \beta)} = c \int_{-1}^1 |\varphi(t)| (1-t)^\alpha (1+t)^\beta dt < \infty$$

与る関数 φ 全体の集合とする、 $c = 1/c = C_{(\alpha, \beta)} = \Gamma(\alpha + \beta + 2) / 2^{\alpha + \beta + 1} \Gamma(\alpha + 1) \Gamma(\beta + 1)$ である。 $\varphi \in L$ に対して ε の ρ - ρ 展開 $\varepsilon = R_k(t) = R_k^{(\alpha, \beta)}(t) = P_k^{(\alpha, \beta)}(t) / P_k^{(\alpha, \beta)}(1)$ とおいて

$$\varphi(t) = \sum_{k=0}^{\infty} d_k a_k R_k(t)$$

によつて定義する、 $c = 1/c = a_k = c \int_{-1}^1 \varphi(t) R_k(t) (1-t)^\alpha (1+t)^\beta dt$, $d_k = (2k + \alpha + \beta + 1) \Gamma(k + \alpha + \beta + 1) \Gamma(\beta + 1) \Gamma(k + \alpha + 1) [\Gamma(k + \beta + 1)]^{-1}$

$\Gamma(\alpha + \beta + 2) \Gamma(k+1) \Gamma(\alpha+1)]^{-1}$ である。

$\varphi(t) = \sum d_k a_k R_k(t)$ とするとき $\varphi * \varphi$ を形式的に

$\sum d_k a_k R_k(t)$ により定義する。[1] によりこの定理は明らかである。

定理 2. $\alpha \geq \beta \geq -1/2$ とするとき $L = L^{(\alpha, \beta)}$ は定理 1 と同様の性質をもつ。

今 μ を $[-1, 1]$ 上の有界な測度とする。 μ の Fourier 係数

$$\mu_k = \int_{-1}^1 R_k(t) d\mu(t)$$

により定義する。 μ_k が 0 と 1 しか値をとらぬとき μ は中等であるといわれる。

定理 3. $\alpha \geq \beta \geq -1/2$, μ を $[-1, 1]$ 上の有界な測度とする。

もし $\alpha > \beta$ ならば, μ が中等である必要十分条件は $\mu_k =$

0, 1 で十分大なる k に対して定数値 ε とることである。

$\alpha = \beta > -1/2$ ならば, 必要十分条件は, $\mu_k = 0, 1$ で十分大なる k に対して周期 2 をもつことである。

系 4. $\alpha \geq \beta \geq -1/2$, $\alpha > -1/2$ ならば E が Sidon 集合で

あるための必要十分条件は E が有限集合であることである。

定理 3, 予 4 は, $L^{(-1/2, -1/2)}$ は通常の cosine 展開に対応するから, $\alpha = \beta = -1/2$ のときは成り立たない。作用変数 $\alpha, \beta = -1/2$ のときは「解析的」によって特徴づけられるが, $\alpha = \beta > -1/2$ (より一般にしてもよい) のときは適当な微分可能性である。

次に $L^{(\alpha, \beta)}$ の dual を考えよう。 $R_m(t) R_n(t) \in R_k(t)$ で展開すると,

$$R_m(t) R_n(t) = \sum_{k=0}^{\infty} g(k, m, n) d_k R_k(t)$$

とある。 [6] にある, $\alpha \geq \beta \geq -1, \alpha + \beta + 1 \geq 0$ ならば

$$g(k, m, n) \geq 0 \text{ であるから } 1 = \sum_{k=0}^{\infty} |g(k, m, n) d_k| \text{ とある。}$$

$A = A^{(\alpha, \beta)}$ の複素数列 $\{a_k\}_{k=0}^{\infty}$ で

$$\|a\| = \|a\|_{(\alpha, \beta)} = \sum_{k=0}^{\infty} |a_k| < \infty$$

なるものの全体とする。 $a = \{a_k\}, l = \{l_k\}$ に対して

$$a * l = \left\{ \sum_{m, n=0}^{\infty} g(k, m, n) d_k a_m l_n \right\}_{k=0}^{\infty}$$

と定義すると A の可換, 単位元 e も δ パラメータ関数となる。

定理 5. $\alpha \geq \beta > -1$, $\alpha + \beta + 1 \geq 0$, $\alpha \geq -1/2$ とするときは
 A の極大イテッル空間 \mathcal{M} は閉区間 $[-1, 1]$ と homeomorphic
 して $a = \{a_m\} \in A$ の Fourier-Gelfand 変換は \mathcal{M} のべき項式
 展開

$$\hat{a}(M_x) = \sum_{m=0}^{\infty} a_m R_m(x)$$

と与えられた, $\mathcal{M} = \mathcal{M}_x$ は x に対応する極大イテッルである.
 証明は [8] にある.

定理 6. $\alpha \geq \beta \geq -1/2$, $\alpha > -1/2$ とするとき $[-1, 1]$ の閉
 集合 E が Helson 集合であるための必要十分条件は E が有限
 集合であることである.

証明. E が有限集合ならば Helson 集合であることは明らかであ
 る. 今無限 Helson 集合があるとする. 部分集合を考えて
 E は唯一つの集積点 x_∞ をもち可付番であるとしてよい. 従
 って $\{x_1, x_2, \dots, x_\infty\}$ とする. 定義から $\{a_m\} \in A$ が存在
 して

$$\sum_{m=0}^{\infty} a_m R_m(x_n) = \frac{(-1)^n}{n}, \quad n=1, 2, \dots, \infty.$$

最初 $x_\infty = 1$ とする. $\forall (1 - x_{n+1}) < 1 - x_n$ としてよい.

$$\sum_{m=0}^{\infty} a_m (-1)^n [R_m(x_n) - R_m(x_{n+1})] = \frac{1}{n}$$

$$\text{よ} \quad \sum_{m=0}^{\infty} a_m \sum_{n=0}^N (-1)^n [R_m(x_n) - R_m(x_{\infty})] = \sum_{n=1}^N \frac{1}{n},$$

とすると $R_m(x_n) - R_m(x_{\infty}) = O(m^2(1-x_n))$, $R_m(x_n) = O(m^{-(d+\frac{1}{2})}(1-x_n)^{-(d+\frac{1}{2})/2})$ であるから $k = k_m \leq 1-x_{k+1} < m^{-2} \leq 1-x_k$ であるから k とすると,

$$\sum_{k+1}^N |R_m(x_n) - R_m(x_{\infty})| = O(1), \quad \sum_0^k |R_m(x_n)| = O(1)$$

とすると、この式を $N \rightarrow \infty$ ($N \rightarrow \infty$) すると ∞ となる。 $x_{\infty} = -1$ のときも同様である。

最後に $\{x_n\}$ が $-1, 1$ と距離 $\varepsilon > 0$ とを考へよう。このとき ε は 定数 $C > 0$ が存在して

$$\sup_m \left| \sum_{n=1}^{\infty} \ell_n R_m^{(\alpha, \beta)}(x_n) \right| > C \sum_{n=1}^{\infty} |\ell_n|$$

とするとこれが dual の論法と測度 $\sum \ell_n \delta_{x_n}$ を考へると出る。
 $R_m(x_n) = O(m^{-d-1/2})$ であるから $N > 0$ が存在して

$$\left| \sum_{n=1}^{\infty} \ell_n R_m(x_n) \right| < \frac{C}{2} \sum_{n=1}^{\infty} |\ell_n|, \quad m > N$$

一方 non-zero 行列 $\sum_{n=1}^{\infty} \ell_n R_m(x_n) = 0, m = 1, 2, \dots, N$ であるからとれる。矛盾。

定理 7. $\alpha \geq \beta \geq -1/2, \alpha \geq 1/2$ ならば各変 $\{x\}, -1 <$

$p < 1$ の非 S 集合である。

証明は R^3 に対して Schwartz の論法を参照せよ。

文献

- [1] R. Askey and S. Wainger, A convolution structure for Jacobi series, *Math. Res. Cent. tech. rep.*, 1967.
- [2] R. Askey and S. Wainger, A dual convolution structure for Jacobi polynomials, *Orth. Expansion and their Conti. Analog.*, 1968.
- [3] S. Bochner, Positive zonal functions on spheres, *Proc. Nat. Acad. Sci., U.S.A.* 40 (1954) 1141-47.
- [4] R. R. Coifman and G. Weiss, Representations of compact groups and spherical harmonics, *Emerg. Math.*
- [5] C. Dunkl, Operators and harmonic analysis on the sphere, *Trans. A. M. S.*, 125 (1967), 250-263.
- [6] G. Gasper, Linearization of the product of Jacobi polynomials, I, II to appear.
- [7] I. I. Hirschman, Jr, Harmonic analysis and ultraspherical polynomials, *Proc. Conf. on Harmonic Analysis, Cornell* 1956.

- [8] S. Igari and Y. Uno, Banach algebra related to the Jacobi polynomials, *Tohoku M. J.* 21 (1969) 678-683 with the
Corrector to it.
- [9] B. Muckenhoupt and E. M. Stein, Classical expansions and their relation to conjugate harmonic functions, *Trans. A. M. S.*, 118 (1965) 17-92.
- [10] N. J. Vilenkin, Special functions and the theory of group representations, *A. M. S. transl.* 1968.